

こんにちは！ 室長の工藤です。

平成24年4月6日に第1回目を配信したこのメールマガジンも250回を超え、今回で丸5年を迎えることになりました。配信を始めた頃は執筆者も多く、執筆の順番が回ってくるのが2か月に1回ほどでしたが、ここ数年は毎月1回のペースで書くことになっており、テーマ探しに苦労しながらも、何とか回数を重ねることができました。時折、「トリビア読んでいるよ！」と声をかけていただくことも、執筆の励みになっています。



フランコ・イタリアン缶詰会社の  
の広告(『油川町案内誌』  
歴史資料室蔵)

さて、本年度最後は、3日前に発見した史料をご紹介します。

それは、大正8年(1919)1月25日付で油川村のフランコ・イタリアン缶詰会社の附属農場が、畜産試験場北海道支場長に宛てた「種豚払下願」という文書です。ご存知のように、フランコ・イタリアン缶詰会社は神戸にあるラザラ・オンベール商会などが出資し、ジュゼッペ・ファブリがその監督者として油川村に派遣されました。

ファブリ自身は工場が完成して間もなくの大正7年7月に亡くなります。しかし、会社自体はイワシの缶詰を盛岡・秋田方面に移出して、利益を上げたようです。さらに附属の農場を持っていました。そして、この農場で青森県では初のトマト栽培が行われた…という説もあるそうです。その農場が、大正8年初めに種豚4頭の払い下げを求めていたのです。

この申請に対して油川村では農場の調査をしており、その文書も添付されていました。これによれば、農場はおそらく缶詰工場と同時期にスタートしたと推測され、畑作と養豚を行っていました。ここで新たに種豚の払い下げを求めたのは、会社は大正8年から村内の「汚物収集」を始め、これをもって養豚(の拡充)と肥料生産を計画していたからなのです。さらに、村からも10円の奨励金が交付される予定となっていました。

その後、この養豚業がどのように展開したのかを明らかにすることが次の課題となりますが、4月1日に町制施行が実現する油川村では、それに合わせるかのように新しい産業が芽生えていたのです。

ところで、歴史資料室では、メールマガジンの配信のほかに、年に数回『広報あおもり』に「青森タイムトラベル」という歴史コラムを載せています。先日20回目の連載となりました。来年度は4回シリーズで油川地区を特集する予定です。

メールマガジンともども、こちらもよろしくお願いいたします。

次回からは新年度、気持ちを新たに6年目のスタートにつきたいと思っています。